

『愍諭弁惑章』の位置づけ

——最澄・徳一論争の展開上において——

吉 田 慈 順

一 問題の所在

伝教大師最澄（七六七～八二三）と法相宗徳一（？～八四二？）の論争で扱われた問題の多くは、両師の滅後、後世の人師へと引き継がれることとなった。即身成仏義もその一つであり、この問題は最澄の直弟子達を中心として、極めて大きな比重をもって論じられている。

天台の即身成仏義は、慈覚大師円仁（七九四～八六四）によって密教が導入されることで、五大院安然（八四一～九〇二）からへと繋がる新たな展開を見せるのであるが、最澄滅後から円仁帰朝までの期間については、この間の事情を伝える資料がほとんど現存しておらず、どのような即身成仏義が構築されていったのか明らかでない。しかしながら、この時期には、寂光大師円澄（七七二～八三七）らによって、所謂「唐決」がなされており、これが即身成仏義にどのような影響を与えたかについては、検討すべき大きな問題であるといえよう。

このような中であって、今回、金輪院安慧（七九四～八六八）の『愍諭弁惑章』（以下『弁惑章』）が、この従来明らかでなかった時期に成立した書物であり、更に本書の即身成仏義に唐決の影響が見られることが分かってきた。そこで、本稿では、『弁惑章』の即身成仏義の検討を中心に、本書の位置づけについて考究していきたい。

二 『弁惑章』の即身成仏義

『弁惑章』は、「蝙蝠者」^①と呼称される天台宗批判者に対する反駁書であり、全十二章から構成されている。この中、第一章から第四章までが即身成仏に関する議論であり、本書のおよそ三分の一を占める分量となっている。

さて、天台の即身成仏義の基本となるのは、最澄の『法華秀句』『即身成仏化導勝』である。これは、『法華経』と『普賢経』を経証として、「三生」までに「初住分真即」に入ることを「即身成仏」と定義したものであるが、『弁惑章』の

即身成仏義においても、この最澄説が採用されている。即ち本書は、即身成仏の位を、最澄と同じく「初住分真之位」⁽²⁾に置いており、また、即身成仏に隔生を含める点も最澄と共通している。⁽³⁾このことから、『弁惑章』の即身成仏義が、『法華秀句』を基本としていることが分かるのである。

しかしながら、両書には、即身成仏の経証に関して興味深い相違が見られる。即ち、『弁惑章』の第一章「示即身成仏文」では、蝙蝠者の問いに応じて即身成仏の経証が挙げられているが、最澄説が『法華経』と『普賢経』を経証としていたのに対して、『弁惑章』は『華嚴経』『無量義経』『菩提心論』等をこれに加え、十三經二論から計二十五文を引用して即身成仏の経証としているのである。このことから、『弁惑章』の即身成仏義には、最澄説を補強する意図があったものと考えられる。この点は、本書の即身成仏義における大きな特徴であるといえるが、今回、更に以下のような興味深い特徴が明らかとなったのである。

三 『弁惑章』と「唐決」の関連

『弁惑章』「通即身成仏疑第二」は、蝙蝠者の以下の論難に答えたものである。

蝙蝠者、第二ノ文ニ云ク、問フ、若シ有ラハ聞ニ法華円教ニ即身ニ成仏スルコト、何カ故ソ、舍利弗等ノ声聞ハ、往昔ノ於大通智勝仏ノ十六王

『愍諭弁惑章』の位置づけ (吉田)

子ノ時ニ始メテ聞ニ法華ヲ、發心シ、修ニ菩薩行ヲ、經ニ六十劫ニ至ニ十住、第六心ニ不レ成ニ仏道ヲ、更ニ退ニ流スルヤト生死ニ。已上

(『伝全』卷三・三八三頁)

つまり、「『法華経』を聞くことで即身成仏できるのであれば、どうして舍利弗等の声聞は、過去世で大通智勝仏から『法華経』を聞いた際に即身成仏しなかったのか」との問いであるが、ここで注目したいのは、「至ニ十住ノ第六心ニ不レ成ニ仏道ヲ、更ニ退ニ流スルヤト生死ニ」という蝙蝠者の論難である。この論難は、『瓔珞経』の教説に基づくものであるが、対する『弁惑章』の回答は以下の通りである。

又、十住ノ第六心ニ、更ニ流ルハ生死ニ者、汝、但雖トモ聞ニ身子ノ第六心退ノ文ヲ、而未ダ知ニ其ノ義ヲ。今当ニ為ニ汝カ示シ其ノ義趣ヲ。本業瓔珞経ニ云ハク、身子、於ニ十住ノ第六心ニ退ニ。通レズ此レヲ有ニ二説。一ニハ云ク、第六住ノ退トハ者、是レ仏ノ權説ニシテ、其ノ実ハ不レ退セ。……二ニハ者、第六住ノ退トハ者、應ニ云フニ十住ノ第六信ノ退ト。何トナレハ者、別教ノ第六信ハ見猶ホ未ダ尽キサルカ故ニ有ニ退墮ノ義。是ノ故ニ、大唐国ノ三教講論ノ湛師判シテ云ク、或カ云ク、身子ノ六住ノ退トハ、有ルカ云ク、是レ六信ノ退ナリト。六住ノ退ノ義ハ終ニ難成シ。既ニ墮ニ邪見ニ、六住ニ無ニ此ノ義。故ニ唯タ應ニ呼ビテ信ヲ為スヘキノ住ト耳。別教ノ七信ニ断レ見。六信ハ未ダ断レ見ヲ、墮邪ノ義ヲ成スナリト。

(『伝全』卷三・三八五―三八六頁)

即ち、①仏の方便の説である、②別教の六信位についての説である、という二種の解釈で『瓔珞経』の説を会通しているのであるが、今回、この回答が『円澄疑問・広修決答』(以

『愍諭弁惑章』の位置づけ（吉 田）

下、『円唐決』と『円澄疑問・維罽決答』（以下、『澄唐決』）に基づくものであることが明らかとなった。

まずは『円唐決』であるが、以下の通り、『瓔珞経』の説を仏の方便の説とする点が『弁惑章』と共通している。

答フ、^一拋^二リテ本業經ニ云ク、即チ十住ノ中ノ第六住ノ退トハ、亦示^二スカ実行ニ故ニ退ハ非サルナリ実ノ退ニ也。……具ニ案ニ彼ノ經ヲ、起信論ノ疏ニ云ク、但是^レ權教ニシテ非サルナリト実ノ退ニハ也。

（『新出統藏』卷五六・六七七頁・上段）

更に、『澄唐決』については、以下の傍線部がほぼ完全に『弁惑章』の説と一致するのである。

答フ、大師ノ菩薩戒疏ニ云ク、身子ノ六住ノ退トハ、有ルカ云ク、是レ六信ナリト。六住ノ義ハ終ニ難シ成シ。既ニ墮^二ニストハ邪見ニ、六住ニ無シ此ノ義。只タ^二ニ呼レヒテ信ヲ為スヘキノミ住ト耳。別教ノ七住ニ断ス見ヲ。六ハ未ダ断セサレハ見ヲ、墮邪ノ義成スナリト。

（『新出統藏』卷五六・六八六頁・中段）

さて、『澄唐決』は「大師ノ菩薩戒疏ニ云ク」として、これを天台大師智顗説・章安大師灌頂記『菩薩戒義疏』の文としている。しかしながら、これは『菩薩戒義疏』の取意の文であり、『澄唐決』独自のもののなのである。⁽⁵⁾ このことから、先の一致は、『弁惑章』が『澄唐決』を引用した結果であることが分かり、『弁惑章』と『円唐決』『澄唐決』とに、影響関係を認めることができるのである。

四 『弁惑章』の成立時期

『弁惑章』の成立時期については、上杉文秀博士が「又、安慧は承和十一年に出羽の国の講師となった。……彼の愍諭弁惑章の一書は正に此時の著作であろう」と推測されている⁽⁶⁾が、従来、これを裏付けする根拠が示されることはなかった。そこで、先に述べた『弁惑章』と『円唐決』『澄唐決』の影響関係から、本書の撰述時期について検討してみたい。

『円唐決』『澄唐決』は、承和十（唐会昌三、八四三）年十二月に入唐僧仁好らによって将来され、翌年の承和十一年（八四四）年五月七日に叡山へと送られている。⁽⁷⁾ つまり、この「承和十一年五月七日」が、『弁惑章』成立の上限である。また、本書に付される安慧の跋文には、以下の通り「承和十四年四月十五日」の識語が見られる。

右一箇ノ比量ハ、下野ノ州ノ薬師寺別当僧、法相宗ノ智公、承和十四年四月十三日、於ニ国分塔会ニ所ナリ立ツル也。……天台宗ノ沙門伝灯法師位安慧、於ニ下野ノ大慈寺菩提院遊行ノ次ニ、聊カ以テ鈔記ヲ畢ル。伏シテ庶幾ハクハ、同シキ我ニ後哲、幸ニ莫ニ嗤咲スルコト矣。承和十四年四月十五日。

（『伝全』卷三・四四四頁）

これによつて、本書成立の下限を、「承和十四年四月十五日」に置くことができるのである。以上の検討結果から、『弁惑章』の成立時期は、「承和十一年五月七日」以降、「承和十四

年四月十五日」以前の約三年間に限定することができる。

五 結語

最後に、これまでの検討を踏まえて、『弁惑章』の位置づけを行いたい。

『弁惑章』は、承和十一年五月七日以降、承和十四年四月十五日以前の約三年間という限られた期間において、当時最新の見解であった『円唐決』『澄唐決』をいち早く取り入れ、蝙蝠者との論争の解決を試みた書物である。

また、本書の即身成仏義が最澄の規定に忠実であること、その成立が円仁の入唐中であることを考えると、本書は、円仁によって本格的な密教が導入される以前において、最澄説の補強を目的として成立した書物であると位置づけられよう。

これらのことから、本書の即身成仏義は、最澄滅後・円仁帰朝前という、従来明らかでなかった期間における天台教学の様相を示すものであり、この点において、本書の価値は実に大きいものであると考えられる。

- 1 安然の『教時諍論』には、「安慧座主ハ伝灯ノ之代ニ、亦タ作リテ
 愍諭弁惑章三卷ヲ、以テ破ス德溢ノ天台宗未決義一卷ヲ。（『大正蔵』
 卷七五・三六六頁・上段）」と記されているが、『弁惑章』「通三

『愍諭弁惑章』の位置づけ（吉田）

権一実疑第七」には、「蝙蝠者」門徒（『伝全』卷三・四〇一頁）、「通索車不索車疑第十二」には、「法相宗」智公（『伝全』卷三・四四四頁）の論難が挙げられているため、本書の対論者には、「蝙蝠者」「蝙蝠者」門徒「法相宗」智公の少なくとも三師が想定されていたこととなる。この点、『教時諍論』の説はやや不可解であるが、これについては機会を改めて検討したい。

- 2 『伝全』卷三・三八八―三八九頁。
- 3 『伝全』卷三・三八九頁。
- 4 『大正蔵』卷二四・一〇一四頁・下段。
- 5 『大正蔵』卷四〇・五六四頁・下段―五六五頁・上段。
- 6 上杉文秀著『日本天台史（正）』（破塵閣書房、昭和一〇年）、三二五頁。
- 7 清原恵光稿「『唐決』解説」（『日蔵』卷九八、昭和五二年）、三六四頁。

〈キーワード〉 安慧、『愍諭弁惑章』、唐決、即身成仏

（龍谷大学大学院）